課題カテゴリー２　被災者が失ったものと、複雑な心情への寄り添い

➢ 課題２．家族機能、コミュニティ機能の喪失を社会的役割の代替により再生する必要性

【現状・問題点】

#）被災前は３世代同居であったが、みなし仮設住宅等の狭さ等から、被災後は家族が別々に生活し、構成が変わっている世帯もあった。一緒に暮らしていた家族が離れて暮らすことが長期化するなかで、被災前より孤立感を抱く方が多くいた。

#）被災前に行っていた家族間での協力がしづらい環境となり、意欲の減退につながる方がいた。（子どもの送迎や放課後の預かり、介護サービス利用の際に助け合うなど）

#）市内外の広範囲に避難先が分散し、真備地区を離れた生活が長期となることで、地元情報（口コミ）の入りにくさや、近隣に知り合いがいないことからくる孤独感、土地勘がないことによる買い物など日常生活のしづらさがある等、ストレスも大きかった。

【方向性・対応策】

- **喪失した部分を取り戻そうとするのではなく、少しずつ被災者同士の交流の機会によって社会的役割を担い、自身の果たせる機能を新たに生み出していくような視点をもった「声かけ」が必要。**
- **孤立防止や情報共有のために、地域ごとでイベントやサロンなどの交流の機会を増やし、被災者同士の相互の交流を促す。**

➢ *課題３．被災者の気持ちの表出、心情への寄り添い（被災という経験をし「推し量れない感情を抱えている」という現実）*

【現状・問題点】

#）被災後は、真備地区住民が集まる場（サロンやイベントなど）を求める声が多かった。被災時のことを語り合いたいだけでなく、単純に「顔をみたい、会えば元気になれる」という気持ちがわいてくるようだった。

#）再建に迷い、悩み、心を痛めている複雑な心境は、同じ経験をした者同士でしか語れないという気持ちもある。心情を語り合うことで、「近い気持ちの共有、共感」が得られ、被災者自身が「自分はこんな気持ちをもっていたんだ」「こういう部分に悩んでいたんだ」と、徐々に気持ちが整理できていく過程と時間（場所）が必要だった。

#）一方で、サロン的なところで語るよりも、個別に語ることが必要な被災者もいた。そこには、「同じ被災者ではないからこそ語れる」という複雑な心情もみてとれた。

#）被災直後の状況や抱えている事情などには、かなり個別性が高く深い問題もあった。行政や近隣への不満が募っている場合もあり、見守り連絡員に対して「あなたたちに言っても仕方ないことだけど」と言いながらも語ってくれたことは事実であり、何らかの形で気持ちの表出が必要だった。

【方向性・対応策】

- **これまでの不満や今後の不安等、様々な感情を抱えている被災者は多いため、戸別訪問や、被災者同士の交流を通じて、感情を表出できる機会を作る。話をすることで、被災者自身が考えを整理し、気持ちが楽になり、一歩前に進むことの一助となる。**
- **順調に再建を進めているようにみえる方においても、被災という、ある日、突然大切な多くのものを一度に失ってしまうという大きな傷を背負ってしまったこと、推し量れない状況や感情（喪失感、理不尽さ、怒り、等々）を抱えて毎日日々を送っているのだと、被災者の基本的な理解としてもっておく。**

➢ *課題４．新たなコミュニティへのつながりのタイミング（「どこに住むのか」が決まっていない段階ではコミュニティなどへのつながりは求めない）*

【現状・問題点】

#）真備地区以外の借上型仮設住宅に入居している被災者のなかには、そこに住んでいることを周りに気づかれたくないという方や、そこでの生活は一時的なものと捉え近隣との関係性を積極的には作ろうとしない方もいた。

#）居住地のサロン等への参加に抵抗を感じている人でも、真備地区での集まりには参加し、そこで近隣の状況について聞いたり、真備地区に戻るか戻らないかの話をすることで、気持ちを大きく変える人もいた。

【方向性・対応策】

- **「今後どこに住むのか」を決めきれていない段階では、コミュニティへのつながりを敢えて求めない被災者心理が存在することを理解し、個々の被災者に合ったタイミングで、地域とのつながりを促していく。**
- **個々の被災者に合ったタイミングを適時適切にとらえ、その方に合った「場所や方法」につないでいくためには、見守り支援事業のなかで個別性の高い聞き取りを定期的に継続し、対象者をあらゆる角度から総合的に理解していく視点（支援姿勢）をもつことが必要。**